万葉のススキ・オバナとオギ―万葉人はどう区別したか―

木下　武司

ヨシ・オギ・ススキはイネ科植物でいずれも茎末に花穂をつけ外形がよく似る。とりわけオギとススキは専門知識がなければ的確な区別は難しい。万葉集ではススキの別名としてオバナもあって、名前の類似するオギと本当に区別されたのかという疑問も提起されよう。本発表ではヨシ・オギ・ススキ（オバナ）が古い時代ではどう区別されたか、さらに一つの植物種であるはずのススキになぜオバナの別名があるのか考えてみたい。

万葉集で五十一首の歌にあるあしは抽水植物ヨシと考えて差し支えない。しかし、枕詞ながら「葦が散る」とあるのは、ヨシではなく、形態が類似し、花期に小穂が激しく散る別属種のダンチクである。また、「葦の根のねもころ～」（巻十一　二七五八）とあるのは流れの速い河川中流域の砂州に生える同属近縁種ツルヨシである。オギはヨシとは水辺を挟んで生えてオギ―ヨシ群集を形成し、「葦辺なる荻」（巻十　二一三四）とあるのはまさにそれを表す。古代人は生態の違いでもって形態の酷似するオギ・ススキを識別したが、ヨシとの区別を苦手とした。「伊勢の浜荻」（巻四　〇五〇〇）はしばしばヨシと解釈された（住吉社歌合）が、同属植物のより大形で海浜に多く生えるセイコノヨシをいう。ススキは乾燥した台地に生え、水辺を好むオギとは生態的立地が全く異なる。しかし、オギ・ススキが酷似することを古代人も認識していたことは、をぎ・をばなる紛らわしい名の存在で示唆される。すなわち、ススキの花を表すのに言語学的に末端を意味する「を」に花をつけて別名オバナとし、オギでは茎をつけてヲ茎とし、これによってオギは詩歌では花を意識しない名となった。一方、ススキはまったく別系統の名で、煤茎（すすき）に由来し、古代日本各地に存在したカヤ原を野焼きした際に、株立ちのススキの根が焼け残って茎の先端が黒く焦げたのを表した。平安の古歌にある「すぐろのすすき」も同じである。

はじめに

万葉集に約一六〇種の植物が登場するが、その多くは有用植物であり、万葉人にとって身近な存在であった。その中にはヨシ・オギ・ススキのように形態の酷似する植物種も含まれている。とりわけオギとススキは、現代でも専門知識がなければ、的確に区別することは難しい。また、ススキにはオバナという別名があり、名前の類似するオギも含めて、万葉人はどう区別してきたのだろうか。オギとオバナの混同はなかったと言い切れるのであろうか。別名はどのような経緯で発生したのであろうか。

1．「あし」について

万葉集に詠われる「あし」は五十一首ある。漢名に葦・蘆・葭の三種類があるのは中国の古字書に基づくもので、分別が曖昧であったことによる。万葉集の「あし」は、植物の生態を表すイ～ニと、有用植物として利用したことを示唆するホ～チに分類できる。五十一首の大半は今日いうヨシと考えて間違いないが、②の「葦の根～」は別種のツルヨシである。③の「葦が散る」という枕詞は小穂の散りやすい別属種ダンチクとする方が相応しい。ヨシの茎で作った破魔矢を神棚に飾る風習は中国起源の追儺に由来する。万葉集の「あし」を避邪植物として解釈することは稀であるが、⑥の「葦火焚く」は『荊楚歳時記』にある記述との関係が認められる。

用字　葦（27）、蘆（7）、葭（1）、安之（14）、阿之（2）

イ．葦（辺）（1）―鴨・鶴・雁（12）
1-64、3-352、4-617、6-919、6-1062、6-1064、10-2134、10-2135、12-3090、13-3345、15-3625、15-3626、20-4400

ロ．葦鶴・葦鴨・葦蟹（7）
4-575、6-961、11-2768、11-2833、16-3886、17-3993、17-4011

ハ．湊（水門）―葦（5）
7-1288、11-2468、11-2745、12-2998、14-3445

ニ．葦原の瑞穂の国（5）
2-167、9-1804、13-3227、13-3253、18-4094

ホ．葦垣の（3）
6-928、9-1804、13-3272（枕詞）

ヘ．葦垣（7）
11-2565、11-2576、11-2762、13-3279、17-3975、17-3977、20-4357

ト．葦（荷）刈（る）（3）11-2748、17-4006、20-4459

チ．葦火焚く（2）11-2651、20-4419

リ．葦が散る（2）20-4331、20-4362（枕詞）

①若の浦に　潮満ち来れば　潟をなみ　葦辺をさして
若浦尓　塩満来者　滷乎無美　葦邊乎指天
鶴鳴き渡る
多頭鳴渡
（巻六　〇九一九）

②葦の根の　ねもころ思ひて　結びてし　玉の緒といはば
葦根之　懃念而　結義之　玉緒云者
人解かめやも
人將解八方
（巻七　一三二四）

③あしひきの　山菅の根の　ねもころに　止まず思はば
足桧木之　山菅根之　懃　不止念者
妹に逢はむかも
於妹將相可聞

④菅の根の　ねもころ妹に　恋ふるにし　ますらを心
菅根之　懇妹尓　戀西　益卜男心
思ほえぬかも
不所念鳧

（巻十一　二七五八）

⑤海原の　ゆたけき見つつ　葦が散る　難波に年は
海原乃　由多氣伎見都〃　安之我知流　奈尓波尓等之波
経ぬべく思ほゆ
倍奴倍久於毛保由

（巻二十　四三六四）

⑥難波人　葦火焚く屋の　すしてあれど　己が妻こそ
難波人　葦火燎屋之　酢四手雖有　己妻許增
常めづらしき
常目頻次吉

（巻二十　四三六四）

●【資料1】
『爾雅』
「葦の醜は芀なり。〔郭璞注〕其の類は皆芀秀有り。葭華〔郭璞注〕即ち今の蘆なり。」（葦醜芀。〔郭璞注〕其類皆有芀秀。葭華〔郭璞注〕即今蘆也。）
『説文解字』
「葦は大葭なり。葭は葦の未だ秀でざる者なり。」（葦大葭。葭葦之未秀者。）
●【資料2】
『萬葉集仙覺抄』
「然るに菅はもとの草むらの根のはるかに遠く這ひてころごろに群がり茂るなり。されば、それによそへてころごろと詠めるなり。」
●【資料3】
『日本植物方言集成』
ヨシ―ヨシタケ（和歌山）、ヨシダケ（奈良）
ダンチク―ヨシ（和歌山）、ヨシタケ（京都）
●【資料4】
『荊楚歳時記』（宗懐）
「正月末日の夜、蘆苣の火、井厠の中を照さば、則ち百鬼走る」

2．「をぎ」について

オギは万葉集ではわずか三首に登場するにすぎないが、後世の詩歌に与えた影響は大きい。しかし、花ではなく葉を秋風あるいは音と取り合わせているのは形態的に酷似したススキ（オバナ）とは対照的である。万葉集における用字は漢名で荻が二首、万葉仮名の乎疑が一首である。中国本草は荻を独立した項目として扱わず、葦の類型の一つとした。荻は『藝文類聚』の泛江詩から導入したと思われる。古代人にとってオギはススキよりむしろヨシとの区別の方が困難であった。ともに水辺に生えるので、古代人は生態の違いでオギとススキを区別したらしい。伊勢の浜荻はしばしばヨシと解釈されるが、抽水域に生えるヨシでは折り伏せて寝るというのは非現実的である。『大和本草』や『伊勢參宮按内記』によれば、伊勢地方に多かったというものは片葉であるから、それが正しいとすればセイコノヨシである。かなり乾燥した土でも生えるから、「折り伏せて旅寝やすらむ」も不可能ではない。

⑦葦辺なる　荻の葉さやぎ　秋風の　吹き来るなへに
葦邊在　荻之葉左夜藝　秋風之　吹來苗丹
雁鳴き渡る
鴈鳴渡
（巻十　二一三四）

⑧妹なろが　使ふ川津の　ささら荻　あしと人言
伊毛奈呂我　都可布河泊豆乃　佐左良乎疑　安志等比登其等
語りよらしも
加多理與良斯毛
（巻一四　三四四六）

⑨神風の　伊勢の浜荻　折り伏せて　旅寝やすらむ
神風之　伊勢乃濱荻　折伏　客宿也將爲
荒き浜辺に
荒濱邊尓
（巻四　〇五〇〇）

●【資料5】
『新編国歌大観』
をぎのは　1033件　おぎのは—あきかぜ　219件
をぎのは—そよぐ　37件

●【資料6】
『圖經本草』（蘇頌）
「謹みて按ずるに、爾雅は蘆根を謂ひて葭華と爲す。郭璞は云ふ、蘆は葦なり、葦、即ち蘆の成したる者、蒹を謂ひて蒹（廉と同じなり）と為す。蒹は萑（音桓）に似て細く長く、高さ数尺なり。江東人呼びて蒹薖（荻と同じなり）と為す者は茭（他敢切）と謂ひて薌（五患切）と為す。薌は葦に似て小さく、中は実にして、江東呼びて烏薑（音丘）と為す者は、或は之を荻と謂ふ。荻は秋に至りて堅く成し、即ち之を萑と謂ひ、其の華は皆苕（從彫切）と名づく。」（謹按、爾雅謂蘆根爲葭華。郭璞云、蘆葦也。葦即蘆之成者、謂蒹為蒹（與廉同）。蒹似萑（音桓）而細長、高數尺。江東人呼為蒹薖（與荻同）者謂茭（他敢切）為薌（五患切）。薌似葦而小、中實、江東呼為烏薑（音丘）者は、或は謂之荻。荻至秋堅成、即謂之萑、其華皆名苕（從彫切。以下略）

『藝文類聚』巻第八「水部上　江水」泛江詩
春江は白帝に下り、畫舸は黄牛に向かふ。
錦纜は沙磧を迴り、蘭橈は荻洲を避く。
濕花は水に隨ひて泛かび、空巣は樹を逐ひて流る。
岸社に喬木多く、山城の迴樓に足る。
（春江下白帝、畫舸向黄牛。錦纜迴沙磧、蘭橈避荻洲。濕花隨水泛、空巣逐樹流。岸社多喬木、山城足迴樓。）

●【資料7】
『住吉社歌合』（嘉應二年十月九日）
「そもそも和歌のうらのみちは、（中略）この神風いせしまには、はまをぎとなづくれど、なにはわたりにはあしとのみいひ、あづまのかたには、よしといふなるがごとくに、おなじきうたなれども、人の心よりよりになむあるうへに、たまのことばにきしをましへ。（以下略）」
『萬葉集仙覺抄』
「伊勢國には葦をはまをぎと云也。攝津國にはあしといひ、あづまによしといふといへり。」
『俊頼髄脳』
「伊勢の濱荻とよめるは荻にあらず、葦をかの國にはいひならはせるなり」

●【資料8】
『大和本草』（貝原益軒）
「伊勢ノ濱荻ハ三津村ノ南ノ後ロニアリ。片葉ノ蘆ニシテ常ノ蘆ニハカハレリ。」
『伊勢參宮按内記』（講古堂藤原長兵衛）

「濱荻　三津村の南の江にあり　片葉の芦の常の芦にはかはりたる芦なり。是を濱荻といへり。」

『勢陽雜記』（山中為綱）

「濱荻　二見口三津村南の入江に有、五十鈴川の末　昔ハ鷺の森を中嶋になしたる入江に濱荻有しと也。近來鷺の森兩方より堤を築、其中を田地とし、三津村より耕作しけり。其田の中にわづか半段計荻を殘し侍る。いと名高き致景の所もかく淺撓くなり侍るなり。此後ハ跡かたもなく、風の音さへなくならんと心あらん人いかでかかなしまざらんや。爰成芦ハ異様にて左巻に皮を見せて有と云々。此所より詠じて伊勢の浦にてハいづこも濱荻をよむとみへたり。」

3．「すすき」、「をばな」について

3-1．万葉集における「すすき」と「をばな」の表記

万葉集に登場する植物学上のススキは「すすき」と「をばな」の二系統がある。漢名は正訓の旗芒にある「芒」のみで、残りはいずれも万葉仮名表記である。芒は『本草拾遺』（陳藏器）の石芒の条に出てくるが、七三九年の成立であるから、直接の出典とは考えにくい。古字書の『説文解字』にある芄は芒の本字であるが、艸耑からススキを連想するのは困難である。より明確な注釈をしている『爾雅郭璞注』の芒を略体化したものであろう。中国本草で芒が出現するのは一五九〇年に成立した『本草綱目』以降であり、ススキを表す。

○すすき

爲酢寸（4）・須々伎（1）・須々吉（1）

○はだすすき

皮爲酢寸（3）・波太須珠伎（1）・波太須酒伎（2）・者田爲々寸（1）・波太須酒吉（1）

○はたすすき

旗芒（1）・旗須爲寸（1）

○はなすすき

波奈須爲寸（1）

○をばな

尾花（7）・草花（4）・乎花（3）・麻花（1）・乎婆奈（1）

○はつをばな

初尾花（1）・波都乎花（1）・波都乎婆奈（1）

●【資料９】

『説文解字』

「芄は艸耑なり。艸に从ひて芄の聲。」（芄、艸耑。从艸芄聲。）

『爾雅』

「芒は杜榮なり。〔郭璞注〕今の芒草は茅に似たり。皮は以て繩索、履屩と爲すべきなり。」（芒、杜榮。〔郭璞注〕今芒草似茅。皮可以爲繩索履屩也。）

『重修政和經史證類備用本草』巻九　陳藏器餘「石芒」

「高山に生じて芒の如く、節は短し。江西の人呼びて折草と爲す。六月七月、穂を生じて荻の如きなり。」

『本草綱目』（李時珍）巻十三「芒」

「芒は二種有り。皆叢生し、葉は皆茅の如くして大、長さ四五尺、甚だ快利にて、人を傷ること鋒刃の如し。七月、長莖を抽き白花を開く。穂と成し蘆葦花の如きは芒なり。五月、短莖を抽き開花して芒の如きは、石芒なり。並びに花より將に放たんとする時、其の籜皮を剥ぎ、繩箔草履諸物と爲すべし。其の莖穂は掃帚と爲すべきなり。」

3-2．「はだすすき」と「はなすすき」

万葉集にただ一首出現する「はなすすき」に関しては、原表記の波奈須爲寸を波太須爲寸の誤写とする見解と、ススキの花の意とする見解があり、近年の注釈書は前者の見解が主流のようである。ススキの花については、後述するように、「をばな」の別名があるが、『新撰万葉集』に花薄とあり、古今集以降にも多出すること、⑪の「秋萩すすき散りにけむかも」は「すすき」でもって花を表しているので、万葉集でもススキの花を「をばな」以外で表現する例があることを示し、「はなすすき」とするのが適当と考える。「はだすすき」は、賀茂真淵がいうように、穂にはだける前の状態を指す。

⑩めづらしき　君が家なる　花すすき　穂に出づる秋の
目頬布　君之家有　波奈須爲寸　穂出秋乃
過ぐらく惜しも
過良久惜母
（巻八　一六〇一）

⑪帰り来て　見むと思ひし　我がやどの　秋萩すすき
可敝里伎弖　見牟等於毛比之　和我夜度能　安伎波疑須〃伎
散りにけむかも
知里尓家武可聞
（巻十五　三六八一）

⑫新室の　こどきに至れば　はだすすき　穂に出し君が
尓比牟路能　許騰伎尓伊多礼婆　波太須酒伎　穂尓弖之伎美我
見えぬこのころ
見延奴己能許呂
（巻十四　三五〇六）

⑬はだすすき　穂にはな出でと　思ひたる　心は知らゆ
者田爲爲寸　穂庭莫出　思而有　情者所知
我も寄りなむ
（巻八　一六三七）

●【資料二】

『新撰万葉集』巻上秋部

花薄曾與鞆爲禮者秋風之吹歟砥曾聞無衣身者

花すすきそよともすれば秋風の吹くかとぞ聞く衣無き身は

『倭名類聚抄』

「薄　爾雅云ふ、草の藂生するを薄と曰ふ　新撰万葉集和歌云ふ、花薄　波奈須須岐　今案ずるに即ち厚薄の薄の字なり　玉篇に見ゆ　辨色立成云ふ　芊　和名同上　今案ずるに芊の音は千　草の盛なるなり　玉篇に見ゆ」（薄　爾雅云、草藂生曰薄　新撰万葉集和歌云、花薄　波奈須須岐　今案即厚薄之薄字也　見玉篇　辨色立成云　芊　和名同上　今案芊音千　草盛也　見玉篇）

『冠辞考』（賀茂真淵）

「又皮の字を書たるによれば、はたのたを濁りて膚のこゝろとし、さて穂を皮にふくみもて漸に開出るなれば、はだすゝきといふらんとも覚ゆ。」

3-3．「をばな」は「すすき」の花に特化した名である

『古今要覧稿』はオバナを同属類似種のオギの花と解釈し、ススキとは別種とする。確かに⑭と⑮では「すすき」と「をばな」が両出し、別々の植物のように見える。しかし、「秋萩の散らへる野辺の初尾花」（15-3691）、「春日野の尾花」（16-3819）、「高円の尾花」（20-4295）、とあるオバナから、本草にいうオギの湿草というイメージは見えてこない。したがってススキ・オバナは同物異名と考えるべきで、オバナはススキの花に特化した名である。

⑭はだすすき　尾花逆葺き　黒木もち　造れる室は
波太須珠寸　尾花逆葺　黒木用　造有室者
万代までに
迄萬代

⑮さ雄鹿の　入野のすすき　初尾花　いつしか妹が　（巻八　一六三七）
左小壯鹿之　入野乃爲酢寸　初尾花　何時加妹之
手を枕かむ
手將枕

（巻十　二二八三）

●【資料12】

『古今要覧稿』（屋代弘賢）

「をばな一名をぎのはなを古は尾花或は麻花或は草花或は乎花などさまざまに書しを延喜の頃よりはたゞ尾花の字のみを用ゆる事とはなりにたり」

3-4．「をばな」と「をぎ」の語源は同根である

言語学的に「を」は終末・末端を意味する。峯、尾を「を」というのもそれぞれ山、動物の末端だからである。丘・岡の「を」も関連があるとされる。この観点に立てば、オバナはススキの茎の末端についた花だから「をばな」とすればその語源をよく理解できる。オギもススキと酷似する形態をもつが、ススキと区別するために単に茎の末端を意味する「をぎ」と呼ぶようになったと思われる。古典文学でオギの花が意識されていないのもこの語源と無関係ではないだろう。

万葉集で麻花を「をばな」と読む用例が一つあるが、麻を「を」と読むのも無関係ではない。神道でよく用いる神具オオヌサ（大幣）は大麻とも表記するが、神木（サカキなど）の棒の末端に紙垂と麻苧をつける。春日大社の大麻が麻苧であるように、もっとも古い繊維であるアサあるいはカラムシをつけていた。故に、麻・苧を「を」と読むようになったと考えられる。中国の桃茢はモモにヨシの穂をつけたもので、やはり不浄を払う道具とされた。わが国ではヨシやススキ・オギなどの穂を用いたという確証はないが、古くは茎をつけたままの花穂を用いた可能性も大いにある。

●【資料13】

『日本語源』（賀茂百樹）

「尾（ヲ）　身の大なるに対して尾の小なればヲと云ひ、それより尾の後部にあるを以て終尾をヲと云ふ」

『大言海』（大槻文彦）

「を　（三）凡テ、動物ノ尻尾ノ如ク引延ヘタルモノノ稱。（四）ヲハリ。スエ。シリ。」

●【資料14】

『春秋左氏傳』襄公二十九年

「楚人、公をして親ら襚（死者の装束）せしめ、公、之を患ふ。穆叔曰く、殯（棺の移動）に祓ひして襚せば則ち幣を布かんとするなり。乃ち巫をして桃茢を以て先づ殯を祓はしむ。〔注〕茢は黍穰なり」（楚人使公親襚、公患之。穆叔曰、祓殯而襚、則布幣也。乃使巫以桃茢先祓殯。〔注〕茢、黍穰也）

『説文解字』

「蒫は芀なり。艸に从ひて刎の聲。」（蒫芀也。从艸刎聲）

『圖經本草』

「其（荻＝葦）の華は皆苕（＝芀）と名づく」

3-5．焼け野に由来する名「すすき」

ススキは、オギと語源が関連する異名のオバナとは、まったく別系統の名であることは論を俟たない。俗説では「すす」を「ささ」に通じるとするが、ヨシ・オギなど形態の類似する植物が多い中で、なぜススキだけがこの名をもつのか説明は困難である。ススキの語源を考える上で注目すべき和歌の一句がある。⑯の「すぐろのすすき」であり、顕昭はこれを野焼きのススキの茎の先が黒いからと説明し、末黒の略とした。「すぐろ」は草木の末端が焦げたもの一般を指し、⑰～⑳にもあって、必ずしもススキに限らないが、わが国の自然環境において草原植生で優占度のもっとも高い種はススキである。一般に日本列島の植生は森林を主とし、草原は植生遷移の初期状態にすぎない。古くからわが国の各地に存在したススキ原は野焼きによって維持されたもので、多くの和歌に「焼け野」とあることで明らかである。また、各地に黒ボク土という野焼きの名残を示す厚い地層も出土している。

⑯あはづのの　すぐろのすすき　つのぐめば
　ふゆたちなづむ　こまぞいばゆる
（後拾遺和歌集第一　はるごまをよめる）

⑰したもえの　すぐろをあらふ　春雨に　やけ野のすすき
　草たちにけり
（新撰和歌六帖　第二帖「はるの野」）

⑱しもむすぶ　すぐろにかるる　冬草の　なにをたのみと
　なき世なりけり
（新撰和歌六帖　第六帖「ふゆの野」）

⑲をがさはら　すぐろにやくる　下草に　なづまずあるる
　つるぶちの駒
（夫木和歌抄巻第三「堀川院御時百首」）

⑳むさし野の　すぐろが中の　下わらび　まだうらわかし
　むらさきのちり
（夫木和歌抄巻第三「家集中」）

●【資料 15】
『袖中抄』（顕昭）
「すぐろのすゝきとは春のやけのゝ薄の末の黒也。る文字を略てすぐろと云る也。」

●【資料 16】
『武蔵野』（国木田独歩）
「昔の武蔵野は萱原のはてなき光景をもって絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。」

行く末は　空も一つの　武蔵野に　草の原より
　出づる月影
（新古今秋上　四二二）

『問はず語り』
「武蔵野の秋の気色ゆかしさにこそ今までこれらにも侍りつれ、と思ひて、武蔵国へかへりて、浅草と申す堂あり、十一面観音のおはします、霊仏と申すもゆかしくて参るに、野の中をはるばるとわけゆくに、はぎ、をみなえし、をぎ、すすきよりほかは、またまじる物もなく、これが高さは馬にのりたる男の見えぬほどなれば、おしはかるべし。」

武蔵野は　今日はな焼きそ　若草の　妻もこもれり
　我もこもれり
（伊勢物語第十二段）

【参考資料】

ヨシ *Phragmites australis* (Cavanilles) Trinius ex Steudel
湖沼、河川などの水湿地に生える抽水あるいは湿性多年草
地下茎は地中深く縦横に匍匐する
根は蘆根（葦茎）と称し名醫別錄に収載する。傷寒論・金匱要略に本品を配合する処方はないが、千金要方には葦茎湯がある。

ツルヨシ *Phragmites japonica* Steudel
流れの速い川岸、湖岸の砂礫地に生える多年草
走出茎は地上を這い、節ごとに根を出し、茎を出す
ヨシよりやや小形であるが、一般には混同されている

カサスゲ *Carex dispalata* Boott
水湿地に生える多年草で、地下で匐枝を伸ばして群生する
古くは簑笠の原料として栽培された

ジャノヒゲ *Ophiopogon japonicus* (Thunberg) Ker Gawler
山野の林内に生える多年草で、地下で匐枝を伸ばして群生する。根が紡錘状に肥大したものを麦門冬とよび薬用とする。炙甘草湯、竹葉石膏湯（傷寒論）、麦門冬湯、薯蕷圓、温経湯（金匱要略）などに配合される要薬。神農本草經では上品に収載、「心腹結氣、傷中、傷飽、胃絡脉絶し、羸瘦短氣を治す。久しく服すれば、身を輕くし、老ひず、飢ゑず。」と記載する。消渇・虚労の妙薬とされる。

ダンチク *Arundo donax* Linné
海岸や川岸に生える湿性の常緑多年草
古くからヨシタケあるいはアシタケと称された。ダンチクの名は『大和本草』にあり、牧野富太郎によれば、葭竹を葭竹と誤ったものという。葭は椴の意符書換字であり、『爾雅釋草』によれば、木槿すなわちムクゲである。

オギ *Miscanthus sacchariflorus* (Maximowich) Franchet
水辺のやや乾いたところに生える多年草
河原に生えるのはほとんどオギである
茎はススキのように叢生しない

セイコノヨシ *Phragmites karka* (Retzius) Trinius
河川の下流部、海辺に生え湿性多年草、やや乾いたところにも生える。ヨシに似るが、より大形、葉は堅く垂れない。茎の片側に葉がつくことが多く、これを片葉という。

ススキ *Miscanthus sinensis* Andersson
山野に生える多年草で、茎は叢生して大きな株をつくる